

Let's note R3

CMEO 事業部 「I」

本コラムは先月号から持ち回りとなった。先月号で少し紹介されたが、今月号はたびたび本コラムで韓国人に似ていると言われている私「I」が担当させて頂くことになった。取材時のこぼれ話や、韓国や台湾等に出張した際の自分自身の経験にまつわる話を書こうかとも悩んでいたが、結局ここ最近の趣味であるエレクトロニクス機器の分解について書かせて頂くことにした。対象は Panasonic 「Let's note R3」。分解記事はよく他誌や TV で取り上げられているが、私の方は素人が行う分解であるため、その辺のブログにも及ばない。時間のある方だけご覧頂ければ幸いです。



【図 1. R3 外観】



【図 2. キーボードを裏返した状態】

この「Let's note R3」というノート PC は 2004 年に自分用に購入したもので、当時としては軽量性と性能が良かった。ただ、私はその後の OS の進化（？）に合わせて、XP から Vista、そして 7 へと PC を買い換えてきたため、Let's note は 1~2 年ほど前から休眠 PC となっている。先日、たまたま同 PC を立ち上げたら HDD からブォーンという奇妙な音がなり始めたため、とうとうこの HDD も寿命を迎えたと思い、せっかくなので新規 HDD の換装を行うことにした。

しかし、この R3 にはリカバリディスクが付属していない。HDD 内にリカバリ領域があるにはあるが、新規 HDD へのリカバリ領域のコピーが煩わしいというか面倒くさい。大体 7 年も前の PC では性能面での問題も多い。そのため、この機会を利用し初めてノート PC をばらしてみることにした。

まず PC 裏面からネジを取り外すことから作業が始まる。2 タイプのネジが使用されており、それぞれ長さが異なる。長いネジは 2 本で、メインボードまでつながっている。次はキーボードと本体をつないでいるクリップを取り外す。これは LIB を本体にセットする側面に配置されている（このクリップの存在に気付かなかったため、キーボードの取り外しに苦労した）。そこまで行った作業が【図 2】で、手前側に見えるのがキーボードを裏返したもの。その後、CPU 等の上に熱伝導グリスでかぶせている放熱板を強引に取り去る、再度ネジを抜く、キーボードにつながっているケーブル



【図 4. メインボード表面】



【図 5. メインボード裏面】



【図 6. LCD パネル裏面】

ルのコルをコネクタから外す等々の作業を終えると、【図 3】の状態になる。大まかに言うと、右上がカードスロット、右下が HDD、左側がメインボード。

なお、もともと R3 の HDD は東芝製の 40GB であったが、冒頭で述べたように当初は新規 HDD に換装する予定であったため、せっかくなのでバルクで購入した WD の 80GB を換装してみた。写真ではほとんど見えないが、メインボードと HDD の接続に折り曲げられた FPC が使用されている。HDD も分解したかったが、ネジが余りにも固いために挫折した。

左下には Intel 製の通信モジュール基板が配置されている。その上は放熱板。この頃の R シリーズはファンレスタイプで、PC で作業していてもほとんど音が発生しなかった。いつの頃からか覚えていないが、その後の R シリーズはファン付きに変わった。静音設計は施してあるのだろうが、それでも音がうるさいという印象を受けた。一時は最新の R シリーズへの買い替えをずっと悩んでいたが、結局 LCD パネルの解像度が R3 と同じであったこと、ファン付きであったことで、他の PC に買い換えることにした。そう考えると、ファンレスタイプの R3 というのは満足度が非常に高かった

【図 4】及び【図 5】はメインボードの表面と裏面。前後左右がバラバラの状態の写真撮って

あるのはご容赦願いたい。裏面中央にあるのはメインメモリ（純正品は Hynix 製）。同 PC は最大 768MB までのメモリ増設が可能であったが、当時は 512MB のメモリ価格が高かったし合計 512MB もあれば十分だと思い、PC 購入後すぐに Buffalo の 256MB を付け足した。メモリは PC 裏面から簡単に増設できる設計であったため、非常にやりやすかった覚えがある。

R シリーズの特長として軽さとタフさが挙げられる。特に、タフであることは Let's note の代名詞でもある。メインボードをみると、そこかしこに緩衝材が使用されていることが分かる。写真では見えにくいですが、【図 5】の左上に 1 つ配置されている。さすがに HDD を使用している以上、私はできる限り大事に扱ってきたが、こうしたタフさを持つ Let's note には使用上の安心感があった。

【図 6】は LCD パネル裏側のもの。天板と LCD パネルはツメで接合されていたが、なかなか取るのに往生した。できるだけ LCD パネルを破壊しないようにしたが、結局ガラスが割れて液晶は漏れるわ CCFL は壊れるわで、とても見せられるような状態ではないため裏面のみを掲載した。これだからシロートは...



【図 7. PC 部品①】



【図 8. PC 部品②】

色々と端折って説明してきたが、正直言ってこの業界のプロを前にこうしたコラムを書くこと自体、赤面モノである。しかし、私はこの PC が大好きで、いつしかこの PC を分解することをその最期としたいと考えていた。折よくこうした機会を得られたことに感謝したい。

しかし、この PC の役割はまだ終わっていなかった。この PC の残骸は会社のロッカーに保管してある。いま私の部下が FPC/TAB を担当しているため、FPC や COF がどう使われているのかを現物で見せ、今後の教育材料として活用する予定である。これからもこの PC には末永く役立ってもらいたい。

執筆者略歴：「I」

2001 年入社後、プラスチックを中心とした素材およびその加工製品市場に関して一貫して調査研究を実施。材料という観点からエレクトロニクスにおける幅広い分野で調査研究実績を持つ。